

JASIS

NEWS

No. 53

2014/1/14

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

大会を振り返って

学会長 直井英雄（東京理科大学）

本年度の大会は、平成25年10月26、27日に京都で開催されました。直前まで心配であった台風の影響もすっかりなくなり、豪華な企画が満載の大変楽しい大会となりました。小宮先生をはじめとする実行委員会の皆様に、深く感謝いたします。

まず、見学会がすばらしいものでした。最初に見た角屋は、いわずと知れた京都島原の揚屋の名建築ですが、各座敷それぞれ違うテーマの凝りに凝った「インテリア」を見せられて、感嘆するばかりでした。造った職人たちの自慢げな顔が目に浮かぶようでした。私がこれと同じような体験をした建築として、熱海の起雲閣、信州渋温泉の旅館金具屋、東京目白の和敬塾本館などを思い出しましたが、これらはみんな、いわば「インテリア」で遊んでいるわけですね。高級で本当に贅沢な遊びです。

また、次に見た西本願寺では、御影堂や書院、唐門ばかりでなく、飛雲閣の外部・内部などまで見せていただき、これはこれで正真正銘の眼福をいただいたという気持ちになりました。しかし、私にとって予想以上におもしろかったのは、伊東忠太の設計になる伝導院でした。東京の築地本願寺と同様、古今東西のさまざまな様式、デザインが混淆した摩訶不思議な建築で、その方面の幅広い教養がなければとても読み解けないような、手強い風格を備えた外観と「インテリア」が印象的でした。

見学会のあと開催された懇親会も、なごやかで楽しい会になりました。会の中で、まさか舞妓さんの踊りが見られるとは思っていませんでしたが、京都ならではの「お・

も・て・な・し」を堪能いたしました。

さて、翌日の大会本番。例年通り、研究発表会、学生の作品展と作品賞の顕彰、川本重雄氏による講演会などが、参加者の皆様のご協力により、つつがなく執り行われました。川本氏は、会場をご提供いただいた京都女子大学の学長で日本建築史の研究者ですが、この大会での講演は、日本建築における空間の仕切りとそこで行われる儀式との関係についての話でした。建築構法を大学で教えている私にとっては、日本と西欧の建築における空間の開放性と閉鎖性についての様々な対比的な特性までも改めて思い起こさせられるような、大変興味深い話でした。

ところで、本大会の行事として特に記録にとどめておくべきことといえば、本年から 若手を対象として、すぐれた研究発表を顕彰するという企画を始めたことです。初めての試みなので、どうなるのか若干心配もありましたが、これも関係者のご尽力のおかげで、目的どおりうまくいったのではないかと考えております。若手研究者のはげみとなる行事ですので、来年以降も続けていきたいと考えております。

以上、何やら旅行感想文のような、素朴な総括になってしまいましたが、結論としては大変楽しい有意義な大会であったということです。実行委員会の皆様をはじめとするすべての関係者諸氏のご協力に、改めて感謝する次第です。

■第25回日本インテリア学会大会報告

大会長 小宮容一（芦屋大学）

大会概要をご覧ください

■第25回日本インテリア学会大会の概要

実行委員長 片山勢津子（京都女子大学）他

大会を京都女子大学で行えないかという打診が平成25年1月末にありました。キャンパス中心が免震工事中でしたので、少し離れた馬町校舎で開催できる10月26日－27日を大会日として決め、実行委員会を開催して京都ならではのおもてなしのために準備にかかりました。

予想外の出来事が2点。まず申込遅延の多さ……締切日を免震工事本格化前に設定したにも関わらず、結果的に現場状態下での作業となり、これは正直応えませんでした。二つ目は大会を控えての台風襲来……会場準備は、搬入物を厳重に梱包してバンで雨中を運搬して行いました。幸い、台風一過の元で初日を迎え、懇親会前には虹空を望むことができました。なお、初日の見学会と懇親会については、担当者からの下記報告をご覧ください。

二日目は、全て馬町校舎での開催です。開会式の後、研究発表会と卒業作品展が始まり、昼食を挟んで午後は特別講演会で始まりました。

講師は、寝殿造が専門の日本建築史家 川本重雄 京都女子大学学長で、テーマは「日本の住まいとインテリア ―歴史的な視点から―」です。日本の開放的な住まいは風土から生まれたのではなく歴史の所産であることについて、歴史的事例を提示しながら論じられました。

研究発表会午後の部を終えた閉会式では、名誉会員の称号授与や卒業制作作品と学生研究発表優秀賞の発表がありました。学会での功績を讃えて名誉会員とられたのは、島崎信、小松暁一、岡島達雄、小原誠、木村戦太郎（敬称略）の5名の方々です。なお、卒業作品展と学生研究発表の受賞については、別途報告をご覧ください。

今年は大会参加121名、研究発表53題（パネル発表3題）でした。院生の発表や参加が多かったのが特徴で、学会に新しい風が吹き始めたのを感じながら全ての行事を終ることができました。ご協力頂きました実行委員諸氏に心よりお礼申し上げますとともに、ご参加頂いた会員と関係各位の皆様にご挨拶申し上げます。

見学会

見学場所は、角屋もてなしの文化美術館と、西本願寺・伝導院であった。

当日は、時々小雨が降る日であったが、角屋に参加者47名が集合。小宮大会長の挨拶の後、中川館長様の御先導により見学会が開始された。

角屋（すみや）の建物は、島原開設当初から連綿と建物・家督を維持しつづけて、江戸期の饗宴・もてなしの文

化の場である揚屋建築の唯一の遺構であり、当時の町衆の生活を垣間見る事ができた。約1時間30分の見学後、大型の貸切バスで次の見学地『西本願寺』へ向かった。現地では、社会部宗教教育担当の遠山様の出迎えを受け、『西本願寺伝導院』の見学に向かった。伊東忠太の設計で、1912年竣工の築100年建築である。シンボルとなるドーム屋根を頂く八角堂を持つ个性化的な外観である。

西本願寺境内に戻り、重文『御影堂（ごえいどう）』を見学した。寛永13年（1636）建立。中央に親鸞聖人の木像、左右に本願寺歴代門主の御影を安置し、重要な行事をこの御堂で行っている。

その後、国宝『唐門』、『書院』を見学した。書院では、国宝の『雀の間』、『雁の間』、『菊の間』等や、『対面所（鴻の間）』などの素晴らしい襖絵や天井画を鑑賞した。また、国宝『能舞台』や特別名勝『虎溪の庭』も見学できた。

最後に国宝『飛雲閣』を見学した。この建物は金閣、銀閣とともに京都三名閣の一つであるので、一行は大変興味深く外観・内部空間を視察した。

飛雲閣を最後に、17時頃見学は終了した。一行は懇親会会場であるリーガロイヤルホテル京都へバスで向かった。

（来海素存）

懇親会

懇親会は「リーガロイヤルホテル京都」にて開催、56名の参加のもと、小宮容一大会長の歓迎挨拶の後、加藤力副会長のご発声による乾杯で宴は始まりました。地元京都の素材を使った料理と伏見の銘酒を囲んで、インテリアの研究、教育についての情報交換や親睦が楽しめました。宴もたけなわ、のタイミングで祇園より舞妓さんを迎え、舞を二差し披露していただきました。曲目の一つは「祇園小唄」でしたが、グラスを片手に口ずさむ方も見受けられ、また披露後は舞妓さんがお酌にまわり、懇談や写真撮影などに、会場は一層和やかな雰囲気となりました。

その後、直井英雄会長からお言葉をいただき、また各支部から活動報告がなされましたが、東北支部の報告には誰も胸の熱くなる場所がありました。片山大会実行委員長のご挨拶で散会としました。

（西山紀子）

2013年度大会における「大会発表賞」の創設について

西出和彦（東京大学）

今年度大会から「大会発表賞」を創設し、若手の奨励として、学生による大会発表（論文発表、パネル発表）のうち優秀な発表数点を表彰することを試行することになりました。2013年度は、次の3題が選ばれ、閉会式で

表彰されました（発表番号順）。

阿部圭さん（日本大学大学院）論文題目「福島県内に立地する屋内子ども遊び場の利用実態に関する研究 その2」

江効珊さん（文化学園大学大学院）論文題目「加速度センサを用いた店舗利用者の歩行様態の把握」

劉亜男さん（文化学園大学大学院）論文題目「百貨店の屋上緑化空間に対する評価構造」



卒業作品展



京都女子大会会場



特別講演会

■ 第25回日本インテリア学会大会 研究発表講評

【計画I】001～005

座長：加藤 力（京都大学）

001～003 はBMI（Brain Machine Interface：人の意志を脳活動から読み取って伝達する装置）を住宅に活用して高齢者・要介護者等の自立生活支援、あるいは介護者の負担軽減を図ろうとする一連の先駆的研究である（中村、近藤、松田）。このための実験住宅である「スマートハウス」と呼ばれる住宅の概要、および研究の意義などを取り上げたのが001である。建具の開閉、キッチンの使い勝手、天井走行式リフトなどにおける有効性を簡便的に検証したものが002である。

これらの研究は総務省から研究委託を受けているとは言え、ハウスメーカーの研究所ならではの可能な未来的研究と云えよう。要介護支援者は500万人近くにもなると云うから大変有意義な研究であろう。将来、どこまでの実用化が可能なのか不透明であるが、高齢者や要介護者の生活行為をあらかじめ想定して、住宅のみならず各種住宅機器の計画をしておくのが、インテリアの計画であるから、BMIなどという装置に頼ることなく生活可能な



見学会



懇親会

状況を生み出すのが、本来のインテリアであろう。

この意味で003の「操作電動車いす乗車時の電動室内建具の開タイミングに関する心理的評価」の実験研究は大変おもしろく、何もBMIを活用しなくとも、これぞまさにインテリアの研究の本質と呼ぶにふさわしいものであった。つまり人の脳で想うこともなく、インテリアの側が人の行動を先取りして対処してくれるのである。いわゆる今年の流行語の「お・も・て・な・し」の精神にも通じる研究である。

004 「住宅の貧困に対するNPOの活動実態と諸問題」(古庄)はNPO法人に対するヒヤリング結果を総括的にまとめた大学院生の研究である。インテリア研究の視点が乏しいことを求めるのは、少し酷であろうか。

インテリアスタイルの研究に取り組むことは、いささか勇気がある。しかしあえて果敢に取り組んだ姿勢には敬意を表したい。

005 「インテリアスタイルについての評価構造と個人属性の構造化」(森永)は、いささか難解な研究である。結果は理解できるが、最終的な研究目標が何処にあるか、そここのところをもう一度、聞いてみたい。

【計画Ⅱ】006～010

座長：平田圭子（広島工業大学）

006 韓国の、今後の単身高齢者用の高層賃貸アパート対策のために、アメリカのミネソタ州セントポール市にある高層賃貸アパートを対象に、①外観の特徴、②基準層の共用空間の特徴、③韓国とアメリカの公共賃貸アパートの外観と共用空間の特徴を検討している。その結果、共用空間を効率的に設置することによって高齢者の自然な交流が可能になり、多様なサービスと便宜施設が高齢者の自立をささえるとしている。どの国においても重要な案件である。対象とした高層賃貸アパートの竣工がほとんど1960年代・1970年代であることから、近年に建設されたものを対象としたらさらに参考になることが得られるのではないかと推測する。建物全体のプランとエントランスとの関係などについて質問があった。

007 共同住宅における集合玄関の分析を、竣工図の読み取り、現地調査の実施により行い、エントランスホールとアプローチの関連、総戸数別の具体例比較検討、エントランスホールの主要設備についての考察を行っている。まだ現状の様子を把握している段階で有り、今後どのような軸を中心に研究が展開されていくのか楽しみである。共同住宅の周辺の地代との関係について等の質問があった。

008 昨年度、本学会大会にて口頭発表された「超高層・高層マンションの居室と収納関係の調査・考察と提案」に対して、本年度はプレハブ系住宅メーカーの住宅の収

納面積についての調査・考察である。結果として、プレハブ系住宅メーカーの住宅においては、2割の理想的な収納面積を確保できる可能性があるようだ。著者によるマンションの洋室における壁面クロゼットとウォークインクロゼットの提案もされており、研究成果をもとにした具体的な提案をセットにした論文形式は興味深い。2割の収納についての文献掲載の有無の質問と、提案されたウォークインクロゼットの扉の開く方向について質問がなされた。

009 高齢者の居場所に注目した物の整理・収納の視点から見た生活空間の提案を目的とした研究である。得られた結果としては、高齢期女性はリビング系居室が居場所となり椅子座で多様な生活が展開されていること、居場所周りにモノが多いとストレスがたまる、又、来客時は片付行動をして接客室としても使用することなどが得られている。この研究テーマは、現在必要とされるテーマであり、今後の報告が待たれる。調査対象者が戸建て居住者かマンション居住者か等の質問があった。

010 二世帯同居における生活リズムのずれの実態調査を行っている。今まで観念的に捉えられていた親世代の方が子世帯より起床時間は早いということが、ライフステージによって異なることなど、興味深い事実が述べられている。研究の目的・方法が明快・的確な研究である。

【計画Ⅲ】011～015

座長：白石光昭（千葉工業大学）

011 実態調査から見たALS患者の暮らし方

ALS（筋委縮性側索硬化症）患者を対象とし、暮らし方やインテリア空間に関する実態を調べた研究である。病状の変化とそれに対応したインテリア空間の変化が述べられている。ケーススタディと言えるが、大切なデータであると思われる。ここでは、現状を中心にした平面図等が掲載されているが、（ページ数の問題があったと思われるが）病状の変化に合わせて時系列の変遷を図に表していただくと実際に参考になったと思う。フロアからは、さらに進行した場合どうなるのかとの質問があり、意思疎通ができなくなった場合は一種の閉じ込める状態になるものと思われると回答されていた。

012 実態調査から見たALS患者の外出行動とその問題点

本研究の対象であるALS（筋委縮性側索硬化症）患者は外出回数が多い被験者であったそうだが、このことにより問題点抽出には参考になったものと思われる。梗概集を読ませていただき、問題点は介護者にとっての問題点を中心ではないかと感じられた。本人にとっての問題点も抽出できたことは参考になりえるが、それとともに介護者側も見直していかなければならないと思われる。今後

そのような点からの整理もされて頂ければと考える。

013 院内助産分娩空間の実態について

筆者が述べているが、院内助産は新しい取り組みであり、空間計画上の整理はされていないようであり、その点からは早期に何らかのデータが必要であり、参考になる研究であろう。本研究では、分娩空間の分類と分娩空間の居住性について検討されている。現状の分類に関しては、医療施設ごとに大きく変わるようである。居住性に関しては、日常的な空間づくりが求められるとのことであった。医療施設内にあるが、他の空間と異なる性格の空間であり、適切な配置計画の提案を期待したい。

014 知的障害者と共に暮らすコーポラティブハウスの住まい方に関する研究

知的障害者と健常者が共に暮らすコーポラティブハウスの事例を対象とし、課題を見つけようとする研究である。障害者に限らず、高齢者等も同じであると思われるが、相互扶助的な仕組みを作っていくことは対策の一つと思われるので、大変貴重な研究であると思われる。建築というハードも大切であるが、ソフト面からのアプローチが重要である。健常者の入居者はおそらく障害を持つ方々に多少なりとも理解を示す人たちであろうが、筆者も書いているように長期的には健常者が感じるメリットをどう組み込むかがポイントになると思われる。

015 病院の食堂に関する調査研究

病院の食堂の整備状況についての実態調査であり、職員用食堂と患者用食堂について検討されているが、紙面の都合で掲載していないのかもしれないが、やや検討不足と思われる。両者の使い方は使用者が異なるので、同じ視点からの設問が必要かどうかを検討すべきと考える。例えば、患者用食堂は見舞客の接客場所でもあるなど、患者用食堂は多様な使い方がなされており、患者側の意見を収集することが大切ではないだろうか。また、病院の規模別でまとめていただくと、違った状況が見えると思われるが、いかがであろうか。

【計画Ⅳ】 016～020

座長：渡辺秀俊（文化学園大学）

016 は、広島県内の大学を対象にして、地域連携事業を担う組織ならびに施設の実態を調査したものである。県内の全大学に対して、地域連携の機能をもつ組織の基本的概要をインターネットによって調査した上で、6大学に対してより詳細なインタビュー調査を行った。その結果、6大学ともに地域連携と産学連携の機能を有していること、また、一部の大学では公開講座などの機能を並行して扱っていること、施設としては応接や事務スペースが一般的であるが一部の大学では学生の活動スペースが設けられていること、などを明らかにしている。

さらに地域住民の利用を考えるとキャンパスの入り口付近に施設を設けることが望ましいとしている。

017 は、016と同じ6大学を対象にして、地域住民への大学開放の実態について公開講座と施設の2側面から分析したものである。その結果、公開講座には連続性や継続性があることが必要で、土日を利用した教室の有効利用も重要であると指摘している。また、施設の開放は食堂や図書館が一般的であるが、雑貨アーティストによる販売や、近隣の小学校のPTA会議、社会人サークルの場として開放される事例もあることが報告された。

2編とも少子化による学生数減少という昨今の状況を鑑みたときの、大学の社会的役割の再考という点では貴重な報告である。空き教室の有効利用などのように、管理・運営の実態と空間構成との適合性についての分析まで踏み込んだならば、インテリアの研究として、より価値のある知見が得られるであろう。

018 は講演者欠席のため、発表は行われなかった。

019 は、東日本大震災後、福島第一原発事故による放射能汚染により屋外での活動が制限されている福島県内の子供たちのために設けられた屋内遊び場の利用実態について調査したものである。昨年度の大会において概要報告がなされた5施設の中から、調査協力の得られた2施設を対象にして、保護者に対する聞き取り調査、ならびに子供と保護者の行動観察調査を行った。その結果、屋外で遊ばせることへの不安の訴えがあったほか、屋内遊び場に通うことで子供が積極的になったなどの肯定的な意見もみられた。行動観察調査からは砂場の利用時間が長いことが明らかになり、利用目的も砂場にあるとの意見があった。

行動観察については、精緻な分析がなされている割には、やや一般的な利用行動追跡調査に終わっている感はある。しかし、人類がこれまでに体験したことのない稀有な環境下における人間行動を分析したという点では、大変に意義深い重要な研究テーマである。今後は、本研究の結果を、屋外での遊び行動に関する既往研究と比較することで、屋内に屋外遊びを仮設的に持ち込むことの限界と可能性を明らかにしていただきたい。

020 は、JR東京駅丸の内北口コンコースの床に描かれた同心円かつ放射状の模様に着目し、そこでの利用者の停留・滞留行動を調査したものである。利用者の性別、行動、グループ人数、位置について分析した結果、行動継続時間が長い「話す」「待つ」「携帯を使う」行動の位置は柱周辺、改札前、中央付近などであり、床面の場所に依存していること、視対象がある「見上げる」「写真を撮る」行動は床面の位置には依存しないことを明らかにしている。また、グループ間の距離は、時間帯によるグループ数とは関係なく平均7.8mであるとしている。

空間の形状や規模が人間行動を規定することについて

の既往研究は多くなされているが、床面の模様は停留・滞留の位置を規定するとする仮説はユニークであり、群集制御の手法として今後の応用が期待される。

【計画V】021～025

座長：近藤雅之（積水ハウス）

021 はインテリア環境評議会でも検討されているインテリア環境評価システムにおける基本概念、評価項目、取り組み方の提言について述べたものである。

そのインテリアに住まう生活者による満足度評価や安全性評価を基本とし、専門家によるコスト、性能、時間（耐用年数など）の評価と、第三者による地球環境保全の視点からの評価という3つのレベルから評価するシステムの概念を提示した。

生活者の評価が入ることでこれまでに一般化されてこなかった満足度・快適性などのフィードバックが得られることは非常に有意義である。一方で、既存の環境評価指標とどのように棲み分けていくかが課題ではないだろうか。検討の継続により、新しいインテリア計画方法の確立への期待がふくらむ。

022 は021との連報で、インテリア環境評価システムにおける評価方法に対する意識や必要性、運用などに関する意識をインテリア職能関連団体に属する会員に対してアンケート調査したものである。

調査の対象となった環境問題に対しては、回答者は全般的に関心が高くその内容についても「省エネ」、「地球環境保全」「天然素材利用」などに関心が高かった。

インテリア環境評価への期待度が高いという結果を受け、今後はどのような形で定着させるかの検討となる。関係各所との調整に時間がかかることは理解しつつも、生活者の利益を高めるこのような評価指標の早期運用が望まれる。

023 は、高気密高断熱住宅の音響性能に関する改善提案について、数例の実物件における実測をもとに考察したものである。

展示用住宅2例において、隣室・上下階の遮音性能、上下階の床衝撃音遮断性能、サッシの遮音性能について計測したデータから、高気密高断熱住宅の遮音性能の短所を見抜き、改善提案とともに、床衝撃音レベルの計測方法に対する改善提案を行った。

省エネルギー性能が高まるのと引き換えに居住性能が低下している事実は見逃せないことから、今後も研究を継続していただき、高気密高断熱ではない住宅との構造や機構的な違いなどに着目した原因の究明や、さらには魅力のある音環境まで導いていただくように期待する。

024 は縁側を暖房熱源とする日本型コンサバトリーのヒートマス効果試算について述べたものである。

建物の形状を敷地の形状に当てはめるのではなく、南方向に建物の南面を正対させることで、南中時の日射熱取得の効率を高めるなどの考察を極めたモデルプランによる試算により、従前の日本家屋の縁側にあった松板フローリングでは表面温度が高まるが蓄熱効果が低かったのに対して、コンクリート土間にすることでその熱容量から表面温度は低くなるが、蓄熱量が大きくなるため夜間の暖房効果が得られるという結果が得られた。

コンクリート土間の厚さが10cm、20cm、30cmの場合の計算結果が提示されたが、実際に建築して生活者が利用する際には、どの厚みが最適となるか、また天候・外気温の影響による表面温度の変動をどう考えるか、といった問題も興味深い。

025 はインテリア製図通則（第1次案）におけるインテリア製図法の標準化に関するヒアリング調査についての報告である。

提案された第1次案の内容について、縮尺、線の太さ、表示記号などの意見を元に第一次案の内容について、案確定の根拠、あるいは修正すべき課題が明らかになった。

インテリア実務では手描きでの図面では伝えきれない部分を正確に伝えていくことが要求されており、従来の建築製図とは異なるインテリア製図法の標準化は非常に有意義かつ重要である。次の取り組みとして、本調査を元にした第2次案作成や解説の提案などを考えられている。インテリア関連諸団体が協力してよりよいものになるようにしていかななくてはならない。

【歴史I】026～028

座長：小宮容一（芦屋大学）

026 は、C.R. マッキントシュのインテリアデザインに関する一連の論考で、今回はこれまでとは視点を変えて装飾パターンについて考察している。まず初期の水彩画の灌木の幻想的描写を指摘。1896年「ブキャナストリート」のティールームの人物にまわりつく蔓草のパターンを指摘。更に、1902年「トリノ国際装飾博覧会」出品の椅子の背にある縦に引き延ばされた薔薇の蔓等々を指摘した上で、それらのパターンが「ケルト模様」に酷似しているとした。また生まれ育ったスコットランド地・文化のケルト文様の影響を受けていると考察した。新しい視点であるが、今回の論考はまだ仮設的域を出ていないように思われる。今後の研究に期待したい。

027 は、コロマン・モーザのインテリアデザインに於ける文様を分析したものである。＜Z邸＞＜モーザー邸＞＜ヘルマン邸＞＜テラマーレ邸＞の床・壁・家具などの施された種々の文様を分析した。結果①平面芸術と関係のあるもの。②日本の文様に類似しているもの。③

独自のものの。の3つのパターンがあるとした。順当な分析であるが、会場から日本的とした文様の中には、世界的にあるとの指摘があった。今後、このような文様を施されたインテリアがどのようなエモーションを持っているかの研究に進まれるかことを期待したい。

028 は、近代イギリスでの陶磁器とインテリアの関係を考察したものである。前段で17～18世紀に王族・貴族の間で陶磁器のコレクションを飾る「磁器の間」が流行したこと、ウエッジウッドが1770年に実用器と装飾器部門を分離したことが装飾器の需要の実証であるとした。その上で18～19世紀の風刺画4種を分析した。銀製品か陶器か、実用か装飾か判然としないものがあるが、1745年「当世風結婚風景」の暖炉の上に描かれたフィギュア・装飾ガラス・陶磁器がインテリア装飾の証しとした。会場から「絵画に於けるメタファー」についての考慮が必要との指摘があった。考察を18～19世紀へと進める様であるが、注意深い観察と分析を望みたい。

【歴史Ⅱ】029～032

座長：河田克博（名古屋工業大学）

029（永田）は、これまで発表してきた近世以前の「道具雛形」と一線を画して、近代の「道具雛形」のひとつ、西洋家具を取り入れた『和洋家具雛形』の内容を考察したものである。「ハイラズ」や「キョククロク」など今日では耳慣れない家具名称もあり、新鮮な内容となっている。家具の種類における和から洋、そして現代家具への変遷を探るうえで歴史的な橋渡しをする意義深い考察といえよう。この種の「道具雛形」は他にも多種確認できるとのことで、今後の進展が期待される。

030（石橋）は、『日本住宅の欄間と植物蘭草との関連性の考察』と題して、「中国の蘭草は日本の藤袴」「平安貴族は香りが拡散しないよう天井を考案」「さらに香りを密閉する間仕切りが出現」「武家で欄間は引違障子から透かし彫り欄間へ」という4つの仮説を立てて考察したものである。しかしながら、この仮説は、欄間や天井が発生・発達した意味におけるこれまでの「建築学」の定説からするとかなり異なっており、建築内部の歴史の変遷過程を踏まえた、より実証的な検討が望まれる。

031（中尾）の論考は、前川國男の建築思想に関する研究の第6報で、今回は、1968年以降に書かれた資料からみる「テクニカル・アプローチ」について考察したものである。前川の言説を丁寧に読み解いて、「テクニカル・アプローチ」の内実を明らかにし、前川の制作における実践を研究する足掛かりとしようを試みたものである。前川の言説を時系列に詳しく追っていったことは大変評価される。しかしながらこの種の論考は、ともすれば評論の一つに終わりがかねない危惧が付きまとうもので

あり、不動の論考にするべく、さらに厳密な考察が期待される。

032（李）は、中国晩清期の絵画史料「点石齋画報」に描かれた盆景の設置方法と位置について考察したものである。史料を読み解き、典型的な盆景の設置方法をA～Hの8方法に分類し、その位置を史料上の絵画で具体的に示している。中国晩清期における中国人のインテリアの趣向や作法を探るうえで興味深い論考である。今後の進展を期待したい。

【歴史Ⅲ】033～035

座長：松本直司（名古屋工業大学）

033 は、劇場デザイナーかつ家具の収集家・鑑定家であったパーシー・マッコイドが著した『イギリス家具の歴史』における家具の分類法に関する考察である。氏の家具の分類法がこれまでしばしば疑問視されていることに対して、この論文では時代と家具の特徴、装飾や技法による素材の関係より、氏の家具分類の意図を探っている。研究の今後の進展を期待する。

034 は、米軍の将校が、第二次世界大戦後の日本でインテリアデザイン事務所を開設し、数多くの仕事をこなし、そのデザインが日本の家具デザインに少なからぬ影響を及ぼした。しかし、この事実はほとんど知られておらず、この論文では米軍将校のつくった2つの事務所（パシフィック・ハウス・ジャパンとミルドレッド・ワーダー）を取り上げ、事業内容を記述するとともに、日本のインテリアへの影響等に関して考察している。研究の視点が興味深い論文である。

035 は、1930年代の英国のコスモポリタニズムについてコスモポリタンとしての建築家を取り上げ、その建築活動について具体的な建築をもとに記述している。さらに同年代のモダン住宅におけるコスモポリタンの活躍を、施主像と建築家像、英国の住まい感、建築家と施主のそれぞれの視点より記述している。内容が豊富であるため文字が詰まりすぎており、2論文に別けるとか書式を他の論文と揃えて応募頂きたいところである。

【教育】036～040

座長：西出和彦（東京大学大学院）

036（山内一弘）は、デザイン系学科における実技科目の教育実践として、色彩構成の教材開発を行い、立体的な構成を考える教材としてブロックに着彩したものを生徒に自作させ、その教材で美しい色彩構成を繰り返し創造できるようにトレーニングし、さらに年度末に生徒の意識調査を行い、当初の目的を達成できたという指導効果を検証したことの報告である。今後の益々の教材開発

と生徒の学習意欲を高める実践の発展を期待したい。

037 (尾田恵ほか) は、学習環境に注目し、ウッド環境における学習効果の検討を行ったものである。ウッドを内装材として使用することで、学習環境が発想力向上にどの程度寄与するか、そもそも学習効果をどのように捉えるかを含め、さらなる検討が必要である。

038 (飛田優子ほか) は、住文化を次世代に伝える住まいの絵本館(特定非営利活動法人子ども住文化研究センター)の活動について、設立経緯、活動の理念、活動分野、設立記念イベントの紹介である。今後の日本の住文化の育成と発展に寄与し、豊かな住生活を享受できる社会の実現を目指したさらなる活動に期待したい。

039 (渡邊裕子ほか) は、長野県須坂市の古民家を利用した実践型「ものづくり教育」、古民家再生作業としての大掃除、床・土間改修、土壁塗り、窯作り、家具作り、ワークショップの紹介である。地域に残る豊富な資産を有効利用しながら、リアルなものづくり教育の実践として、学生にとっても教員にとっても、評価されるものである。今後はものづくりを通じて、文化・生活の継承も含めた発展が期待される。

040 (齋藤怜ほか) は、米国オレゴン大学におけるAllied Arts、建築学部、インテリア分野の履修システム、カリキュラム、授業形態などについての紹介である。今後は1970年代に計画されたキャンパス計画と現在の使われ方の違いについての考察が期待される。

【人間工学】041～045

座長：西岡基夫(大阪市立大学)

041 これまでいす・シートの人間工学的評価手法に用いられてきた体圧分布に代わる、簡便かつ具体的な評価方法として、細長い布を横方向にシートに並べ、座位時に布を抜く時の張力を体圧とみなし、支持すべき点と圧迫すべきでない点を把握しようとしている。専用の機器を必要とせず、どこでも簡便にシーティングの測定が行えることは重要である。また筆者が予めから唱えている、いす・シートづくりに必要な「お尻を鍛える」ことを啓蒙するためにも、本システムを用いることは開発者や人間工学初学者が「座ること」を考えるきっかけになると思われる。

042 商業店舗内で利用者がどのような動きをし、どこに滞留するのかを加速度センサを用いて評価を試みたものである。店舗レイアウトにおいて利用者の行動特性を把握することは重要であり、これまでビデオデータに頼りがちだった行動分析を加速度から行ったことは興味深い。分析も丁寧に行われており、人の動きが定量的に表現できることは新しいことと思われる。このデータが他の評価方法より何が有効となりえるのか、設計・レイア

ウトにどのように活かされるのか、方向性を明らかにした活用方法が望まれる。

043 大学のキャンパスの設備をバリアフリー新法と照らし合わせ、エレベータやスロープがユーザビリティに配慮されたものなのか、建物間あるいは建物内の移動という視点から検証を行ったものである。結果、スロープやエレベータは整備されたが緑地帯がバリアとなり目的地までの車いす走行距離が延びたことや、わずかな勾配が多く障がい者の負担増になるなど、基準には表現されない問題点が明らかになった。今後は実際の車いすユーザも含めた生活弱者による評価も加え、さらに問題点の整理・提案に期待したい。

044 料亭の歴史的価値を再考し有効活用への糸口を探るものとして、内外観の写真からSD法を用いて料亭の印象に重要な因子を分析している。結果として、料亭の印象は「デザイン性」「評価性」「開放性」の因子で構成され、若年女性の嗜好性が強いことが明らかになった。言葉の定義には個人差が強く反映されていると思われ、各部屋での求められる印象の違いや周辺環境も含めた「雰囲気」も重要視されることから、若い女性がどのような内外観・しつらいを重視するのか、広さや明るさなどがどのような状態だと料亭としてふさわしいと感じているのか、今後の報告を待ちたい。

045 高層建築などで用いられている屋上緑化に着目し、単なる環境改善だけでなく、人が利用する上での快適性・利便性を提案するための評価方法と、その因子の抽出を目的としたものである。百貨店の屋上を対象に、パーゴラ・ベンチ・水辺・通路などのアイテムにどのようなイメージを求めるかについて、評価グリッド法から分析を行っている。大変丁寧にデータ収集・分析を行っており期待が持てるが、写真による評価のため「屋上」という空間を正確にイメージできたのか疑問も残る。また地上の公園と比較した時の屋上緑化固有の特徴を把握することも重要であろう。

【各種インテリア】046～050

座長：建部謙治(愛知工業大学)

このセッションは、車両、市庁舎、バーチャルキット、中古住宅というように、小さな建築模型のインテリアから動的な都市景観まで幅広いものを研究対象としている。

046 は、ヨーロッパのLRT車両の調査を実施し、車両座席から見える内部インテリアと窓越しに映る風景との関係性を分析したものである。5か国26都市のデータを基に、座席配置等車両内部の分類、座席からの視界の広がりや方向を調べ、それらを表としてまとめている。しかし、この研究が発展したらどのような成果が得られる

のかが明らかでないため、今後研究の方向性をもう少し明確にしたうえで研究を進めていただきたい。

047 は、アルジェ等7都市のトランジットモールをケーススタディとして、LRTと共存する空間の構成について考察を行っている。既存の古い市街地空間にLRTが通されたことによって起こった変化を時系列的に分析できると、興味深い研究になると考えられる。一方で、これがインテリアの研究と言えるのかという問題もあるので、綿密な研究デザイン（計画）が求められる。

048 は、千葉県佐倉市庁舎の改修プロジェクトを扱ったもので、4つの大学研究室がそれぞれのテーマで取り組み共同研究を行っている。発表者のチームはデザインと建築計画を担当した。この市庁舎がメタボリズムを提唱する黒川記章によって設計されたため、改修に当たってこれを継承することを目指し、現市庁舎の活用案とデザインを考案している。しかし、改修計画では1号棟は鉄骨フレームで構造補強し、2～4号棟は解体し新棟を建設するという。これがはたしてメタボリズムの継承と言えるのか疑問であるという内容などの質疑応答があった。

049 は、1/50の美術館模型を利用して、ここでの展示企画を小型カメラでの映像を利用してプレゼンテーションするバーチャル・ミュージアム・キッドの試験運用に関する報告である。中学生、高校生、大学生や教員という幅広い対象者による展示体験などを通して、参加意欲への効果や模型ならではのスケール感の問題点など、それぞれの特徴や課題が認められた。

050 は、中古住宅購入の阻害要因分析に向けたユーザーへのWeb意識調査の報告である。新築購入者においては、構造の安全性や設備の劣化などに関して、相当の不安を抱いている。しかし一方で、年齢的に若い30代以下の半数については、これらの「不安」が解消されれば購入を検討するという傾向がある。このため、不安解消のための対応・対策を具体的に検討していく必要がある。

【パネル部門】051～053

座長：ペリー史子（大阪産業大学）

051 「山形県献血センター献血ルーム 空間コーディネイト」

学生らと共に実践した、献血センター献血ルーム空間コーディネイトの実際の作業の流れとその成果、これらの空間に対する利用者からの反応に関する具体的な発表である。献血ルームという空間の特殊性から生じる素材やデザインの制限と解決策、作業進展に伴う学生の意識の変化等は興味深いものである。この作業を通して参加学生の献血という行為への意識や空間そのものへの意識

が変わったという報告もあり、学生の成長、及びデザインと来場者数増に関する継続的な調査結果の報告を期待したい。

052 「ふつうに向かう家」

多治見の中心に位置しながら南に竹林を抱く山裾の静かな住環境での住宅設計に関する内容であり、自然と人との関わりをどこで持たせるのか、職人の仕事をどのように多く取り入れていくことが可能なのかを試行しつつ、住宅のあるべき姿を再確認しようとする試みである。「ふつう」とは何かを常に模索しつつ、人にとって大事な空間である住まいにおいて、自然と人の手仕事の跡が身近に感じられる空間の作り方の、更なる展開を望みたい。

053 「東日本大震災後の『コミュニティ作り』の提案に関する一連の報告と考察」

震災後に大事なことは人と人との繋がりが断ち切られないことと考へ、そのためにインテリアデザインから発想し、提案・発表してきた仕組みや街のあり方を一連の復興デザインとしてまとめたものである。具体的にはコミュニティスペースや道の駅にもなり得るMINHOUSEの計画や、木レンガで海辺公園を作る計画等が提示され、全般的にカラフルな色を用いた提案である。コミュニティスペースに必要な事としてあげられている3項目は興味深いところであり、インテリアデザインから広がる可能性について、今後の発展が期待される。

■平成25年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 上野義雪（千葉工業大学）

平成25年度大会は京都女子大学にて開催されました。この開催に際し、大会実行委員会各位に心より感謝とお礼を申し上げます。

次年度大会は、北海学園大学豊平キャンパス（札幌市豊平区旭町4-1-40）を会場に、平成26年10月25日（土）・26日（日）の開催が決まりました。開催決定の背景には、北海学園大学石橋達勇先生のご尽力のあること付け加えさせていただきます。多くの会員のご参加をお願い申し上げます。詳細が決まり次第、学会のホームページに逐次公開致します。

次年度は、学会役員の改選を迎えます。各支部からの評議員選挙により、理事が決まり、その後会長・副会長の3役が決まります。会員のご協力をお願いいたします。

昨年、学会の顧問として島崎信先生に委嘱をいたしま

した。学会活動の今後の方向性についてワーキングを組織していただきご検討をお願いしております。平成26年度の総会にはご披露できるものと考えております。

学会事務局が千葉工大でお引き受けし、2年が経過いたします。その間、名簿の整備と会費未納者への連絡確認など、事務局の押切さんのご協力には頭の下がる思いです。

□広報委員会

委員長 湯本長伯（日本大学）

1) 事務ホームページのサーバーを日本大学に移し、円滑に運用出来ている。また状況に応じて内容更新を行った。最近は何々の掲載情報を戴き、アップデートの循環が出来かけていると思われまます。皆様の情報提供を引き続きお願いします。

広報委員会 URL

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/>

事務局 HP URL

<http://www.jasis-interior.jp/>

2) 広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています（現在56号）。メールアドレス登録者は192名で余り増えませんが、過去のニュースはホームページからすべて見る事ができます。皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/mailnews.html>

3) 今号の会報編集長は、丸茂みゆき委員です。新しく丸茂先生をお迎えして、今後も年間3回の発行を目指して頑張っていきたいと思ひます。その際に会員の意見を代表して戴く編集委員ですが、北海道のメンバーが居られません。前号でも広報委員会への参加をお願いしましたが、北海道・四国そして九州等のメンバーを改めて募集致します。現状は、実質5名で頑張っているところであります。

なお過去の会報も、ホームページから見ることができます。ご活用下さい。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/53.pdf>

4) 今号の編集委員長は丸茂みゆき委員（関東支部）です。初めてのことながら、大変手際よくやって戴きました。なお実際のレイアウト等は九州大学スタッフをお願いしており、編集長の仕事は会報の企画と原稿依頼・督促の知的作業が中心で、直接の編集・レイアウト作業はスタッフがやりますので、意見や企画をお持ちの会員各位の積極的な参加をお願い致します。地域的なバランスや、年齢的な多様性も欲しいのですが、常務委員ということではなくても、ご意見やこれを掲載して欲しいとい

う情報提供があると、大変に紙面向上となります。またHP・メールニュースの編集も行っております。広報委員会へのご連絡は、下記までお送り下さい（MLは追って変更予定）。

JASISeditor@yahoogroups.jp

□国際委員会

委員長 加藤力（宝塚大学大学院）

今回はありません

□論文審査委員会

委員長 松本直司（名古屋工業大学）

現在、論文報告集の24号の審査にあたっております。昨年度の23号では18編採用になりましたが、本年度は8編の応募と例年並みの数になっております。次年度は、またふるって応募の程よろしくお願い申し上げます。

東アジア地区のインテリア学会関係論文集AIDIAにつきまして、本年度は日本では3編の採用となりました。JASIS NEWS No. 52におきまして2編の応募と記述しましたが、メール受取りに通信上の不具合があり、1編が応募されたにもかかわらず漏れておりました。その事実が判明した時点で早急に審査にあたり、どうか応募者にご迷惑をかけずに済みました。

JASIS NEWS No. 52において、当会論文審査委員会に対して広報委員の一人より討論が出されました。この件に関しまして、この紙面をお借りして回答させて頂きまます。ただし募集規程と原稿執筆要領に記述されているご質問につきましてはそちらをご熟読頂きたいと思ひます。ご質問の内容は以下の3点であると理解します。

1) 「論文査読に関する基準の明確化」と言うことですが、「論文報告集審査要領」がありそれにのっとり査読しております。審査要領は理事会での承認を得て決定されたものですので、すでに公開されております。

2) 「論文査読委員の氏名公開」につきましては、現状では、応募論文が少ないので個々の論文に対して査読員が特定されてしまう可能性が大きいため難しいと判断します。過去にさかのぼって数年分の査読員をまとめて公表することは可能と思ひますので、今後の課題と考えます。

3) 「査読意見の書き方に関するガイドラインの設定」につきましては、これも今後の課題と考えます。他の学会を例にしますと、細かなチェックリストにより査読している場合と、そうではない場合などがあります。具体的なチェック内容について今後つめていく必要があると考えます。お時間を頂きたいと思ひます。

本年度実施しました論文報告集に関する変更は、す

にJASIS NEWS No. 52でご報告したとおりです。

これまで査読員2名で査読し、査読結果が採用と不採用に分かれた時に審査委員会が採用・不採用の最終決定をしておりました。本年もこの方式で審査を行うわけですが、将来は査読員を3名目まで定めて査読するという方法も考えられます。出版の期日が遅れる恐れがあることや予算面など、技術的問題を解決する必要があります。よりよい方式になるように今後検討していきたいと思っております。上記2)、3)につきましても検討していきたいと思っております。いずれも理事会の承認事項ですので検討結果はその都度ご報告していくことになります。ご理解いただきますようお願い申し上げます。

■平成25年度支部だより

□東北支部

支部長 若井正一（日本大学）

平成25年度の東北支部総会と支部研究報告会は、11月16日（土）午後に東北芸術工科大学（山形市）を会場に開催されました。参加者数は、正会員、準会員および学生、約30名でした。なお、研究報告会は、第8回目となりますが、下記の6題の発表がありました。終了後、上山市にある郷土料理店「こんにやく番所」に移動して、懇親交流会が開催されました。



第8回東北支部研究報告会の会場風景

記

- ・米国オレゴン大学におけるキャンパス計画の変遷に関する一考察（論文）
○齋藤 怜（日本大学大学院）、若井正一（日本大学）
- ・原発避難区域に立地する知的障害者支援施設の利用実態に関する研究（論文）
○阿部 圭（日本大学大学院）、若井正一（前掲）
- ・福島県内における農家民宿の利活用実態に関する一考察（論文）

- 永沢公規（日本大学大学院）若井正一（前掲）
- ・和を心理的に感じるプロダクトデザイン研究（作品）
○原田悠史（東北芸術工科大学院）
- ・目的に合わせて最適化される移動体の形態研究（作品）
○石倉弘章（東北芸術工科大学院）
- ・リンク機構を用いた家具の研究（作品）
オリジナル作品「Crank Trick# 2（クランクトリックナンバーツー）」の制作
○手島信洋（東北芸術工科大学）

□北陸支部

支部長 棒田邦夫（金沢学院大学）

平成25年8月31日（土）14:00より、上野義雪先生を講師にお迎えして「キッチン作業の人間工学」と題した講演会を、パナソニックショールームにて開催しました。最大収容人数が50人という会場で立ち席もでるほどの盛況でした。参加者の多くはパナソニックの協力企業および顧客の方々と、石川県インテリアコーディネーター協会、インテリアコーディネータークラブTOYAMAの方々でした。みなさんキッチンに関心があるのか、それとも上野先生の話のおもしろさか、時折笑い声も聞こえる中、大変熱心に聞いていただけました。終了後には、次年度以降の参考にとアンケートもとったのですが、アンケートに回答してくださったすべての方が「満足」との評価をしていただき、次年度も再び「参加したい」「上野先生のキッチンの話もっと聞きたい」との意見もいただきました。この誌面をお借りして、上野義雪先生に厚く御礼申し上げます。

また、講演会終了後は場所を移してパナソニックショ



講演会の様子

ウルームの小路所長、石川県インテリアコーディネーター協会の新舩顧問、千田副会長、インテリアコーディネータークラブTOYAMAの荒川会長、今井理事、上野先生そして当北陸支部会員を交えて懇親の会を催しました。

しばらく当支部では講演会を実施していなかったのですが、この講演会の実施によって新しい事業のかたちができるように思います。次年度も引き続きこのようなかたちで進めようと考えています。その折、学会員の方々にご協力願うこともあるかと存じます。お願いの節はよろしく願いいたします。



懇親の会

んである。ヨーロッパ、アフリカ、アジアと歴史や風土の異なる4人の講演は会場に集まった70余名の人々に興味津々な話題提供をしていただくことになった。

一方、インテリア関係7団体が構成する中部インテリアデザイン連絡会は、第13回目のリレーセミナーを10月18日に東邦ガス・栄ガスビルで開催した。年に2度開催するセミナーは恒例となり、多くのファンを持つようになった。今回は家具デザイナー・ブランディングプロデューサーの岩倉榮利氏を迎え「日本発ブランディングデザイン」と題する講演を開催し、こちらも盛況であった。



アロフ・アブドルマレク教授の基調講演風景

□関東支部

支部長 山田智稔（前相模女子大学）

今回はありません

□東海支部

支部長 建部謙治（愛知工業大学）

東海支部では、7月の見学会・講演会の開催に引き続いて、本年度2回目の事業として国際シンポジウムを11月30日に名古屋工業大学において開催した。

このシンポジウムは、昨年2月に実施した「留学生から見た母国と日本のインテリア」の第2段目に当たるもので、「外国と日本の住宅のインテリア」と題するものである。

第1部はアルジェリア・バトナ大学アロフ・アブドルマレク教授による「地中海の民ベルベルの住居とそのインテリア」の基調講演、第2部は留学生3名による「留学生から見た母国と日本のインテリア」の講演と、パネラーによるパネルディスカッションの2部構成である。留学生は今回、アフガニスタン出身で名古屋工業大学大学院生のアディナ・ハシェミさん、ドイツ出身で名古屋造形大学バウハウス交換留学生のトビアス・パーネ君、中国内モンゴル出身で愛知工業大学大学院生の鄂芳尊さ



留学生パネラーたち

□関西支部

支部長 小宮容一（芦屋大学）

会報No. 52号以降の8月9月10月は、大会実行委員会委員が、準備に追われた3ヶ月でした。私は総括が役目ですが、大会1週前に石橋実先生と、日本酒の聞き酒と仕入れに伏見へ赴きました。2人で厳選した5種類の日本酒は懇親会の折に賞味いただきました。さて10月6日（土）の見学会では見識を高め、懇親会では知人を作り友情を高めることになりました。27日（日）の発表大会は各セッション研鑽を高めたことと察します。私としては何より事故無く無事に終了しましたこと安堵すると共に、

実行委員のご努力に感謝するところです。大会の詳しい報告は、本号別ページに片山勢津子先生が執筆・編集の「第25回日本インテリア学会大会報告」をご一読下さい。

12月6日（金）夕方より、大阪中央区の町家改装例の鶏料理・國型製作所/新町店に支部会員14名が集まり、大会の収支・費用の清算、反省、裏話、四方山話に花咲かせ、労をねぎらいました。



発表会場



國型製作所/新町店

□中国・四国支部

支部長 平田圭子（広島工業大学）

1. ミニレクチャー

題目：「照明デザインの仕事」

講師：山本樹里 氏

（大光電機株式会社 中四国支店 広島TACT）

月日：平成25年12月12日

時間：18:00～20:00

会場：大光電機のショールーム

広島国際学院大学・広島女学院大学・近畿大学・広島工業大学・吹穴デザイン専門学校の学生と学会員、計27名（30名の定員制限有り）が参加し、ミニレクチャーが実施されました。今まで主に限られた大学の学生の出席

だけだったので、多くの大学からの学生が一同に集まるのは新鮮であり、是非学生間の交流ができる場を別に作り出したいと思いました。照明士の山本樹里氏の話は、ライティングデザインをするうえで、建築における照明器具の収まりや、その影響による光の広がりについて具体的に話をしてくださり、失敗談や成功談も含めて、非常にわかりやすい興味深い内容でした。LEDについても、青色発光ダイオードに黄色の蛍光体をプラスすることによって白色になることを一番学生が驚いていました。現場に携わることが滅多に無い教員も興味深く聞かせてもらいました。



レクチャー後の質問タイム

2. 「都市のインテリア」原稿依頼

中国・四国支部にてとりまとめている「都市のインテリア」の他の支部会員からの投稿をお待ちしております。詳細は、中国・四国支部のHPをご覧ください。

<http://www.jasis-cs.sakura.ne.jp/>

■平成25年度研究部会だより

□歴史部会

部会長 河田克博（名古屋工大）

〈見学会〉今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2013年10月26日（土）（13:00～17:00頃）に京都市にて開催しました。見学場所は、島原の角屋、西本願寺の伝導院・書院・飛雲閣などです。特別に飛雲閣の内部も見せていただき、和と洋のインテリア空間を、文字通り体験する有意義な内容でした。遠方からの方も含めて多数の参加があり、新鮮な知見を得て盛況裡に進行した見学会でした。詳細は、大会見学会の記事をごらんください。

〈幹事会〉大会に合わせて、10月27日（日）の昼食時に

開催し、今後の事業計画などについて協議しました。とくに、次年度の大会時見学会について、実行委員会への協力を図ることを確認しました。

□計画・構法・デザイン部会

部会長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

□人間工学部会

部会長 白石光昭 (千葉工業大学)

今年も当部会の研究会として、ショールーム見学会(12月6日(金))を行った。

今年はトッパン・コスモ様から、ご快諾をいただき、11月にリニューアルオープンされたばかりのショールームを見学させていただいた。参加者は18名であった。前半はトッパン・コスモ様の開発の基本的な考え方、ユニバーサルデザインの取り組み等をご説明頂き、後半はそれをもとに実際の商品を説明付で見せていただいた。

我々の身の回りの空間や家具等に使用されている様々な素材には、手で触れても「本物」と見分けがつかないような印刷された材が多くあり、印刷技術の高さを実感するとともに、手で触れてもわからない素材は、いったい偽りの素材と言えるのであろうかと考えてしまった。しかし、トッパン・コスモ様の説明において、「印刷という本物」との表現をお聞きし、印刷技術を駆使した素材は今後もさらに広がっていくと実感した。

さて、見学会の開催も常に関東近辺に限られており、多くの会員の皆さんには大変申し訳なく思っています。今後は地方での研究会も考慮していきますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

□教育部会

部会長 河村容治 (東京都市大学)

第20回卒業作品展および巡回展の開催

2013年10月27日(日) 9:30~15:30 京都女子大学J校舎5階会議室1にて、大会本部との共同で第20回卒業作品展を開催した。全国の大学・短大・専門学校・高等学校30校から選ばれた卒業制作の作品35点を展示した。同日、開かれた審査委員会で優秀作品を下記のとおり選出した。大会に引続き、本年も立川ブラインド工業(株)の協賛で、タチカワ銀座スペースAtteにて、12月4日(水)~8日(日)に巡回展を開催し、好評を博し多数の来場者があった。

本年度の応募作品は、空間系が19点、家具系が15点、研究が1点であった。例年に比べ、家具の作品が多く、

秀作なものが目立った。また空間系では道をテーマにした作品が多かったのも本年度の特徴である。

最優秀作品賞に選ばれた広島工業大学「わんぱく森」は、自然のなかでの保育空間の計画で、空間的に優れていただけでなく、そこで行われる教育の内容や運営方法が具体的にわかりやすく表現されていた。優秀作品の多摩美術大学「無限のひとかけ」と名古屋工業大学の「朽ちていくもの 生きて行くもの」は、詩情豊かな作品で静かな感動を与えた。また優秀作品の千葉工業大学「F Chair」は、しっかりとした背景の研究に基づいた家具による優れた提案であった。

[審査委員会]

審査委員長：直井秀雄 (学会会長)

委員：大会長 小宮容一
会実行委員長 片山勢津子
教育部会長 河村容治
教育部会幹事 植松暉子

[受賞者一覧]

・最優秀作品賞：

広島工業大学 環境学部環境デザイン学科 馬場未月
「『わんぱく森』〜こどもの創造性を育む新たな保育空間〜」

・優秀作品賞：

千葉工業大学 工学部デザイン科学科 小笠原拓也
「現代の日本における一人暮らしの生活に適したいすの提案〜F Chair〜」
多摩美術大学 環境デザイン学科建築専攻 富所 駿
「無限のひとかけ」

名古屋工業大学 工学部建築・デザイン工学科
鈴木翔麻「朽ちていくもの 生きていくこと」

・奨励賞：

千葉県立市川工業高等学校 インテリア科
浅川 歩はじめ6名

「高校インテリア科における被災地支援活動〜手作りの木製子供イスを幼稚園に贈ろう〜」



立川ブラインド工業での巡回展の様子

□研究協議会

議長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

□東日本大震災課題検討部会

部会長 齋藤 修 (横浜市立横浜総合高校)

今回はありません

□現代インテリア研究会

部会長 長山洋子 (文化学園大学)

現代のインテリアとは何か、インテリア学とは何かを明らかにするために、またインテリアの研究や教育にアクティブな姿勢で取り組むために、日本インテリア学会20周年を契機に、関心を共有する会員を主体に「現代インテリア研究会」を組織し、インテリア作品の情報を文献・現地見学などにより収集しながら研究活動を行っています。

2009年大会では①現代インテリアについて現代性を示すキーワード群を設定、②その輪郭を明らかにするために地域と時代区分を設定、③日本における主に1980年以降の作品リストの作成方法を検討した事を「現代インテリアに関する研究その1ー現代インテリア研究の必要性ー」で報告しました。

また2012年大会では①作品リストに挙げた作品の基礎データ蓄積方法(フォーマット)の決定、②現代インテリア100選の第1次候補を選定、③作品の現代性をキーワードの検討とともに分析した事を「現代インテリアに関する研究その2ーキーワードによる作品の予備的分析ー」で報告し、近代インテリアとの関連についてご意見をいただきました。

見学会では仙台メディアテーク、東北工科大学、二子玉川ライズタワー、ふじようちえん、軽井沢別荘群など注目される作品の見学会を開催し、インテリアの現代性について調査しています。

この研究会で対象とする現代インテリアは我が国における1980年以降の作品とし、各種受賞作品、誌掲載作品を基に、主に2000~2010年の特筆すべき作品を抽出しリスト化しています。作品シートはデータ蓄積の目的から今後の分析において検索性の高い形式を検討しました。

今回、日本インテリア学会平成25年度「テーマ研究グループ等研究助成」が採択され助成金をいただきました。今後は、作品評価について、有識者アンケートやヒアリング調査を行いつつ、様々な現場調査を予定しています。アンケートはメールによるwebアンケートを予定

していますのでアンケートが届きましたら是非ご協力をお願い致します。



現代インテリア見学会：仙台メディアテーク
鉄骨のチューブで構成される空間から下階フロア(図書室)を見通す。



現代インテリア見学会：仙台メディアテーク
屋上に突き抜けたチューブ空間を下から見上げる。



現代インテリア見学会：仙台メディアテーク
屋上に突き抜けたパーゴラに繋がるチューブ

□インテリア環境研究部会

部会長 加藤 力 (京都大学)

日本インテリア学会において環境評価研究(委員)会が正式に設置されたのは、今年度(平成25年)からである。構成メンバーは、栗山正也、白石光昭、仲谷剛史、加藤力らである。しかし、環境評価研究が幾人かの有志で始められたのは、平成20年のことであるから、すでに5年にもなる。

今、インテリアの分野で最も欠けている要素が「環境」に対する視点であり、それへの具体的取り組みである。「インテリアと環境」は遠くかけ離れたもの、と認識される向きがあるが、決してそうではない。

「インテリアとは、人間生活と直接、深く関わって成り立っているものであり、「環境問題」はこの「人間生活そのものと空間との関係」を根本にまで迫って解決せずには、到底、解決は出来ない課題」なのだからである。この詳細については、本会報(53号)の「インテリアの行方」で、栗山正也氏が見方を変えて、取り上げているので、そちらを参照して頂きたい。

この研究(委員)会で肝心なことは、単にインテリア学会が単独で環境評価研究を進めているだけではない。インテリアコーディネータ、インテリアプランナー、インテリア設計士あるいは商環境デザイナーなどインテリア職能関連7団体と連携・歩調を保ちながら、研究を進めているところに大きな特色と意義がある。環境問題はインテリアに関連する専門家が、一丸となって取り組むべき課題だからなのである。その中心をになうのがインテリア学会である。

むろん、CASBEE(建築物総合環境評価システム)の新たな動向に対しても本研究会メンバーがオブザーバーとしてCASBEE該当委員会に参加し、情報交換・相互関係の構築を続けている。

さて、これまで本研究(委員)会の活動は、環境問題に対する背景整理や各種環境評価法の検討・評価研究などを行ってきた。これから、いよいよ具体的なインテリア環境に対する評価方法(仮称OIKOS)の策定と構築を行っていく予定である。この評価方法は、どのような領域のインテリアの専門家であっても誰でも容易に利用できる方法が好ましく、そのような汎用性、普遍性を持つべきであろうと、考えている。そのために今期、各インテリア関連職能団に対しアンケート調査を実施した。これは本年、第25回日本インテリア学会研究発表梗概集で扱っている。

■事務局より

事務局長 上野義雪(千葉工業大学)

今回は報告事項ありません

■連載『インテリアの行方』

栗山正也(KDアトリエ)

21世紀前夜の1999年1月に「36人のインテリア論」が当学会会報別冊で刊行されています。この年は学会が発足し10年目を迎えた節目の年で、この出版が学会の基盤固めに新たな目標を見出す試みとして企画されたことが思い返されます。

そこで述べられていたことは、「インテリアの意味論」「インテリア環境論」「インテリア学の領域論」など、いずれも学会活動の拠り所になる様々な問題が提起、提言されていました。しかし、そこに想いを載せられた方々の半数近くは現役を退き学会からも離れられていることに14年という時間の経過を感じつつ、課題を抱えたまま、学会の置かれている状況が当時とあまり変わっていないことに、虚しさを超えて不安さえ感じさせられる現今です。

学会に限らず社会全般で、インテリア領域への関心が薄まってきているようにも思えるのは単なる思い過ごしなのでしょうか。一方で、地球環境問題や少子高齢化による人口減少による生活環境の変化への対応は目前に来ていて、その対策にインテリアの専門家が重要な役割を果たさなければならないことは明白です。そこに、有益な人材を育て供給することは学会の役目ともいえます。これらの課題解決は、実業の場に身を置きながら学会とも関わる私のような立場にいる者に課せられた重要なテーマであると、痛切に感じています。

そして今が、学会と業界が連携してやるべきことをやる大切な時期ととらえています。

そのような状況の中で立ち上げた「インテリア環境研究会」(代表:加藤力)ですが、その取り組みの一端を、この場を借りて報告させていただきます。

[報告]

■インテリア業務の専門性と社会的役割

インテリアの専門家の仕事は、人々が生活・活動するインテリアの多様・多彩な“場”をそのクライアント(所有者や使用者)と直接かかわりアドバイスし、要望に沿った適切で快適な環境に仕上げることである。

さらに、広く環境に関わる専門家としては社会に貢献する役割もある筈で、今までインテリアの領域ではこの意識が全般に低かったと考えられる。

本来、専門家の意義とは依頼者等への知識、技術の提供に止まらず、広く社会に対しても有益な役割を果たすことで尊重され、認知・活用されることにあるといえる。

今、生活者に接して仕事をするインテリアの専門家がやるべきことは、自分たちの仕事の中で環境問題を含めて社会に対して如何に責任ある役割を担っているかを明確に表明することであろう。それも誰にでもわかる共通言語で表明することが大切な要件であり、それを共通ツールとして通常の業務の中で、依頼者との確認事項として使える仕組み、例えば「インテリア環境・仕様書（カルテ）」のようなものがあれば業務の専門性を高め、信頼性を得るためにも有効な仕組みと考えられる。

■「インテリア環境・仕様書（カルテ）」の仕組みの要件は以下による。

- ① 先ず、この仕組みで大切なことは、インテリア領域の専門家が、社会が直面している課題や理念を共有し、それを仕事の中に取り込み、その成果を明確に表明することである。
- ② そのためのツールとして、幅広いインテリア業務に共通に使用できる「インテリア環境・仕様書（カルテ）」を策定し、その活用を企図する必要がある。
- ③ そのため、「インテリア環境・仕様書（カルテ）」は専門家が使いやすいだけでなく、一般の人にも解りやすく、共通言語として使えることが必要である。
- ④ 仕様書（カルテ）として共通化できる基本要素は①

省エネ②健康③安全とする。

⑤ インテリア専門家はこの3要素については適切な計画と確実な成果を目指し、併せてクライアントの環境意識を高めることにも貢献する。

⑥ この仕組みの公平性・信頼性を保持するための「組織」としては、学識者等の第三者を交えた審議機関を設ける。

以上が基本の要件であるが、このような“インテリア環境・仕様書（カルテ）」について検討するには、以下の課題を解決する必要がある。

- a. 評価の役割とその必要性の確認（評価は何のために誰がどのように行うのか）
- b. 評価対象空間と評価内容の検討（計画要素と評価要素）
- c. 評価対象と評価の仕組みの具体化と実施

今後、「研究会」はこれらの課題と取り組み、良い提案に向けた検討を進める予定である。

以上

さて、インテリアの専門職能者が社会的に広く認知され、その役割を果たすことでこの領域が拡大し、自ずとそこを目指す学生も増え、教育の場の活力も増してくるはずですが。今必要なことは、デザイナー、プランナー、コーディネーターなど拡散しているインテリアの資格者や職能者が結束して、その社会的な役割を果たすための仕組みを造り、責任を持って実行することを表明することです。そのチャンスは目前にあります。

それを活かすべく、学会も大いに協力し先導していくことが学会そのものを活性化させる起爆剤になると期待しています。

■ 編集後記

丸茂みゆき（文化学園大学）

今回の53号より編集委員に参加させていただきました。執筆者の皆さまには原稿依頼から〆切まで短い期間にも関わらず作成していただき大変有り難く思っております。他の編集者から助けを借りながらの作業でしたが、不慣れで不手際もありご迷惑をおかけしたことと思いません。お詫び申し上げます。

この号は今年度の2号目として大会報告掲載号となっております。会報は年に3回発行を目指し、スムーズな発行に努力して参りますので、皆さまのご協力よろしくお願いいたします。

湯本長伯（日本大学工学部）

今回から丸茂みゆき委員が、渡辺秀俊委員の後任として会報編集に加わって下さいました。この学会は年々高齢化とメンバーの固定化が進んでおり、ある日突然、皆さんが居なくなってしまうという恐れを抱いています

が、そんな中飛び込んで下さった丸茂先生に感謝です。また渡辺先生には長い間お世話になりました。心から感謝申し上げます。

皆様のお蔭で、大会発表講評が出揃いました。学会として、これも感謝、感謝です。会員諸兄姉にとって、本年が良い年でありますよう、心からお祈り致します。

■日本インテリア学会会報第53号（2014. 1. 15発行）

編集者：丸茂みゆき

発行者：直井英雄（日本インテリア学会長）

広報委員会：湯本長伯、片山勢津子、平田圭子

松田奈緒子、若井正一、丸茂みゆき

e-mail：JASISeditor@yahogroups.jp

■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 上野研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp